

戦中

激動の時代を越えて



北川内尋常小学校の授業風景
昭和14年2月卒業記念に撮影。食糧難で物が無い時代、わら草履や下駄で通学した。(上陽)



昭和15年老松天満宮での「武運長久祈願」(矢部)



家庭防空訓練(立花)



欣修塾(きんしゅうじゅく)

昭和12(1937)年、欣修塾は戦中に機密で進められた軍需工場であった。10代から20代の女性が動員され、弾頭部分の製造に従事した。(立花)



昭和初期にアメリカから始まった大恐慌は、八女の経済にも大きな影響を与えます。住民たちが自助努力でそれを乗り越えた頃、今度は昭和12(1937)年の日中戦争の勃発に端を発する戦争の時代が訪れます。同年に立花にできた欣修塾は、機密で進められた軍需工場で、若い女性が動員され、爆弾の弾頭部分の製造に携わっていました。

昭和16(1941)年に太平洋戦争が始まると、戦時色はさらに強まっていきます。出征兵士の見送り、神社での武運長久祈願、英霊の出迎えや地域をあげての葬儀、学校での軍事訓練など、当時の写真が数多く残されています。岡山飛行場の建設、田川の炭鉱などへ、労働者や学生が勤労奉仕に駆り出されることも多くなりました。中でも、炭鉱での作業はダイナマイトで爆破させた瓦礫を集める危険なものだったといえます。

戦争末期には、福岡市や久留米市、大牟田市などで空襲があり、艦上機による機銃掃射で亡くなった方もいました。八女でも、盛んに防空訓練が行われるようになりました。そして、昭和20(1945)年8月15日に戦争は終わり、八女の人々も新しい時代を迎えることになりました。



紀元節 奉安殿(上陽)



勤労報国隊として田川の炭鉱へ戦時中、召集された。これは、坑道に入る前に撮った北川内町と横山村の報国隊員の記念写真。当時炭坑での働き手がいなかったため、各地域から働き手を呼び寄せていた。

常に危険と隣り合わせで、トロッコで坑道を下りて行き、ダイナマイトで爆発させた瓦礫をえびじょうけで集める仕事であった。仕事が終わって穴から出ると、目以外は真っ黒であった。(上陽)



戦死者葬儀の様子(矢部)



松崎尋常小学校 出征軍人村葬(上陽)